

日本家庭教育学会  
令和5年度第38回大会のご案内

◆大会テーマ **知育・徳育・体育と家庭教育**

◆主 旨

近年騒がれる「ショータイム」は、showtimeのことではなく、すっかり sho-time におきかわりました。大谷翔平選手の活躍が、多くの人たちを感動の渦に巻き込んでいます。老若男女を問わず、味方か敵方かさえ無関係に、その一挙一動に熱狂的な声援を送る人たちの映像が、大歓声とともにテレビ画面に映し出されます。肢体が躍動するフォームの美しさやフィジカルの強さからは体、ファンへの対応時などにみせる人を魅了してやまない举止動作からは徳、ドキュメンタリー映像などから知られる緻密な課題克服のプロセスからは知、まさに「ショータイム」、かれに備わる知徳体の調和に感動しない日は、ほぼ一日もないといってよいかもしれません。

英国の社会学者ハーバート・スペンサーが、1860年に著した『教育：知・徳・体』は、1880年に『斯氏教育論』として初めて日本に紹介されました。スペンサーの「教育論」に一貫する考え方は、「家庭教育の重要性」です。その教育法の基本は、子どもが躓いて転ぶと「痛いという罰」、つまり「自然の反作用」を受けるように、親の叱責などの強制罰より自然の罰の効果を重視すべきであるという自由教育論的思想でした。当初は自由教育論の導入を検討した明治政府でしたが、ほどなく家庭教育と学校教育のいずれにおいても、強制教育論が幅を利かせるようになりました。この傾向は、1947年の「教育基本法」によって打破されました。さらには2006年の改正教育基本法において、教育目的達成のためには「知育・徳育・体育」の三育を培うことが謳われ、第10条「家庭教育」で、「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有する」ことが規定されました。ただし、社会の実情は、理念とはまだまだ遠いと思われる。

今日直面する少子化や貧困の問題は放置できないし、あるいは極刑に問われるかもしれない闇バイトに加担し、はては人が変わったように流血の惨事を招く凶悪事件を引き起こすなど、わたしたちは、確かにこうした深刻な社会問題から目を逸らしてはなりません。その一方で、どんなに暗い闇にも一条の光明があってほしいし、またそうあるはずだという希望を持ちたいものです。将来を担う子どもたちは大谷選手のように成りたいと憧れ、親たちはそうした子どもたちの夢に目を細くする。バイオフィリア（生命肯定）の視点から家庭教育を考えてはいかがでしょうか。

◆日 時：令和5年8月19日（土）09：45～16：00

◆場 所：貞静学園短期大学

◆参加費：無料

◆プログラム：

09：15 受付開始

09：45 開会式

10：00 研究発表

12：00 昼食・休憩（\*常任理事会）

13：30 講演・パネルディスカッション

講師：真田久氏

（環太平洋大学教授、筑波大学名誉教授）

パネルディスカッション（進行：前林清和氏 神戸学院大学）

16：00 閉会式・会員総会